

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十一年五月一日発行(毎月一回一日発行)
第十六卷第一号(通巻第一八一号)

鈴



ぐるっけ

創刊 15周年

第181号

5. 2009

俳句雑誌

GLOCKE

丈くらべ

品川 鈴子

花堤句会に間ある小半時

磯そな馴なれ松まつ天を知る芯丈くらべ

松葉杖小脇に抱へ花堤

万葉の「琴池」濁す蝌蚪の紐



龍天へ昇りて濁る溜池か
下闇に食みて椎の葉盛りの飯
印南野の杜ひとしきり呼子鳥
石棺の蓋は小花の苔むしろ
黄麦の囲める池に人柱
六十年経し学駅の柵野ばら



玉鈴

吟

大阪 河村 泰子

雪解けの 一休像は 青年期
吊されし 湖族の 軒の 赤蕪
鴨の陣ときて 群立つ 浮御堂
湖中句碑向き 向き 囲ふ 冬の 禽
梅ひらく まつさを な 空まぢかに し

東京 北川とも子

ざくと 切られし 老木の 芽吹かな
もつれ あふ枝の 先より 春來たる
五位 鷺の 影をつ つみて 春の水
春の 鴨水の 速さを とらへ けり
春寒し 真夜の 耳底 鼓動 打つ

東京 北島 明子

日向ぼこ 孫へ 昭和を 語り 継ぐ
ボロ市へ 来て 寄る 世田谷 資料館
風光 若山 牧水 東京 京展
焼野には 心の 隠し 場所も なし
伊予柑の色 よし 艶よし もう 一個

兵庫 木原 今女

酒蔵の 三十石 桶冬 晒し
六甲 風鳴る 帆柱の 船溜り
母の 碾く 石臼の 棒 冴え 返る
風花に 遊ぶ 幼と 鳩 数羽
公園の 遊具を 潜る 毛糸 帽

兵庫 木村 美猫

おごそかに 開く 蛤うしほ 汁
は やり歌の 一本 調子 冴返る
昼とも し菓子を 肴に 雛の 酒
跳躍に チュチュの 広がり 春に 舞ふ
そばかすの 看板 娘 桜草

愛媛 久保田由布

寒泳を 鼓舞カヌーらが 權立てて
土手 焼きて 土手に 連る 畔も 焼く
雛屏風 享保の 山河 描かれ ぬて
雛 什器 染み一つ 無き 輪島 塗
糟糠の 妻を 看取れり マスクして

兵庫 藏本博美

デイサービス連翹の黄に見送られ
寮生の窓が光れり春の朝
編まれゆく私のマフラー隣席に
欠席者の椅子春光に輝けり
わが買ひし雛今年も飾られて

兵庫 栗田武三

雪解川粥のごとくに噴きこぼれ
飴のごと川流したる冬野かな
雪国のはみだしてきて関が原
伊吹嶺に雪煙の立ち野は晴るる
雪原のほのあかりして伊吹頭つ

兵庫 小阪律子

京時 雨龍 笛一本 百万円
寒風の川岸酒樽ピラミッド
雪の尾根刃のごとく日を撥ねる
弁慶も入りし岩風 呂牡丹鍋
雪達磨ほる酔い加減に崩れおり

東京 後藤とみ子

馬具つけぬ仔馬の跳ねるサーカス小屋
サーカスは人馬一体春隣り
東大に巨樹訪ねをり春立つ日
余寒なほ樹はその姿くつきりと
野も畠も雨を含みて二月尽

大阪 小林 玲子

竹槍で仕留めたといふ猪の肉
猟師小屋人の気配に点灯す
丸まりて明日捌かれるアライ熊
猪の皮晒す小流泡立てる
火を囲み猪の肉売る峠口

香川 近藤 倫子

取れかけの釘付け替へ大試験
駅の名の変はりてをりしいぬふぐり
種を選ぶ何の取柄もない手にて
息継ぎの出来ぬ夢見し受験の子
飯事のやうな結婚春浅し

兵庫 坂口 三保子

子を抱き受けし福笹共に抱く
雪淡く被して山褰現れる
兼六園浮寝せし鴨築山へ
ビニールハウス積りし雪が滑り落つ
木彫雛箱に納めて海渡る

兵庫 佐方 敏明

インコ病み家族が揃ふ浅き春
口開けて眠る婦人も暖房車
春暁の老の合唱サンタルチア
日脚伸ぶ旅の終わりにケーキセツト
白侘助茶店で食ぶる餡もなか

薬草歳時記

(二八〇) オリーブ

市橋章子

神木にしてオリーブは愛の花

大島 民郎

『旧約聖書』「創世記」によると、ノアの箱舟から放った鳩がオリーブの若葉をくわえてもどつてきたので、洪水が引いたことを知ったという。このことからオリーブは、希望と繁栄、平和のシンボルとされています。又、ギリシャ神話の代表的女神アテネの木であり、力と勇気の象徴として、かつてオリンピック競技の優勝者にはオリーブの冠が与えられたことがあります。

オリーブはモクセイ科の常緑小高木。原産地は地中海をとりまく小アジアや北アフリカと考えられ、オリーブ油を採るために紀元前三千年ころから栽培されてきました。幹は高さ二、三十メートル位。葉は対生して、長楕円形、裏が白いので全体が灰緑色に見える。温暖な乾燥地を好み寿命も千年以上と長い。花は小さく、黄白色の四弁花で芳香がある。実は卵形か長楕円形で、油分を多く含みます。

日本に伝わってきたのは江戸時代で、明治時代になって栽培に成功した瀬戸内海の小豆島や対岸の牛窓にはオリーブの林が散見されます。

熟した実から採れるオリーブ油は、オレイン酸を豊富に含んでいます。オレイン酸は、悪玉コレステロールを減らす作用があり、高脂血症や動脈硬化、心臓病の予防、改善に有効で、エキストラバージン・オイルには70%ものオレイン酸を含んでいます。

又、人の皮膚に近い組織をもっており、肌のバリア機能を回復するため、肌荒れや乾燥を改善し、老化を防ぐ作用に、髪の手入れにとさまざまな利用法があります。食べるとよし、塗るとよしの油といえましょう。未熟の実は、塩漬け、酢漬けにすると独特の風味があります。

近頃は、葉に特有の抗酸化栄養素があることが知られるようになり、サプリメントとして生活習慣病の予防に利用されています。

オリーブ油は、日本薬局方に記載され、注射薬溶剤、軟膏基材、皮膚塗布用、浣腸用などに用いられています。花は「仲夏」実は「晩秋」、花言葉は「平和」

参考文献 『原色牧野和漢薬草大図鑑』 三橋博 監修 北隆館

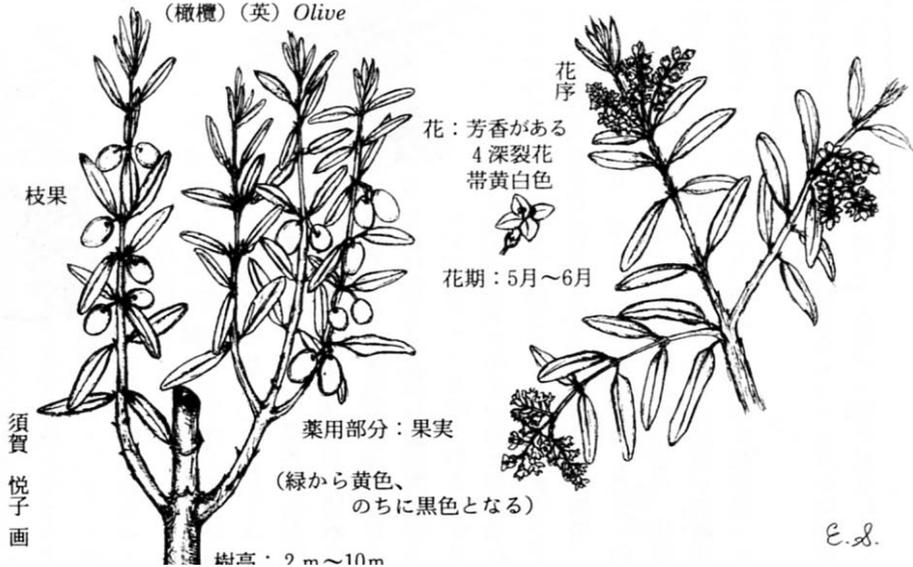
『図説花と樹の大事典』 木村陽二郎 監修 柏書房

著者略歴 神戸薬科大学卒

オリーブ [オリーブ属] (もくせい科)

Olea europaea L.

(橄欖) (英) Olive



オリーブの花にアンダルシア想ふ

*塩出 眞一
(*ぐろっけ)

オリーブの花咲いているレストラン

*北島 明子

オリーブの花星屑に瀬戸の風

*片野 光子

オリーブ摘む少女の肩を沖の船

飴山 實

オリーブの出荷に波止場にぎはへる

吉村ひさ志

黒もあるオリーブの実の外つ国に

坊城 中子

オリーブの収穫どきの活気かな

坊城としあつ

神宿るてふオリーブの実の苦かりき

赤尾 兜子

オリーブの実たわゝ並木道をなす

森田 峠

西班牙の花オリーブのひかりかな

佐川 広治

鈴の奏

品川鈴子選

新築の窓もあいてる後の月 大阪 小菅美代子

野菊咲く主の居らぬ屋敷畑

秋日和園の遊具に鳩ふえて

自転車の前籠に猫漱石忌

バスの客我ひとりなり藤の駅 兵庫 太田 實

石斛の咲いて女房の奇声かな

螻蛄よけら田水を急げ牛が来る

螻蛄よけらそは指なるぞ足なるぞ

風下へ香る白梅女めく 大阪 藤澤希宗子

種芋を植える深さに畝高く

ネーブルの臍に鼻つけ香も買へり

虎落笛Nの字になり眠るのみ

擦られて発火しないか枯木山 大阪 北川 光子

パプア人杵を巧みに寒の餅

学園に化石ざらつき寒戻り

地震訓え具さに聞きて枯葎

緒方拳科白にはなき咳重ね 兵庫 吉田 耕人

国沈みゆく兆かも冬温し
肋^{あはら}まで透き通りたる干蝶

「資本論」棚の隅なる多喜二の忌

クラス会赤いベストを貰ふ春 兵庫 本木下清美

クラス会喜寿十五名一気に春

大太鼓どどどどどん春立ちぬ

撒く豆に皆みな童になつてをり

都会より顔小さき野の寒雀 兵庫 小松美保子

昼茶事の飯一文字春立ちぬ

川に水ひと筋太り初ひばり

春寒の身を引き上ぐる階手摺

壁の窪みはなさじと掴む冬の蠅 兵庫 岡本 幸代

凍雲の居すわる下の石の町

眼だけ残しおおいつくして風邪の町

寒餅を切る音固くとぎれ勝ち

節分会出番待つ鬼見え隠れ 兵庫 仲田 眞輔

節分会鬼金棒でリズムとり

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十五句 蓮尾 みどり 〃

*選句は全て 品川鈴子

新築の窓もあいてる後の月

小菅美代子

虎落笛Nの字になり眠るのみ

藤澤希宗子

新築の家といえば、どんな隣人が住むのかと通りすがりに関心を寄せることだろう。おそらく働き盛りの戸主を中心に、家族構成が予想されて、完成をわくわく待っている。そんな折にふと窓が開かれていて、ちょうど九月十三日の月も昇り、明るい光の差し込むのを見れば、風雅を好む仲間とかんじる。

夜も更けるほど寒風が吹きすさび、その凄い音が耳について、寝付きが悪い。長身を何度も寝返りした挙句、N字形に横たわるのが、一番眠れそうだ。W字形ではない、孤閨の不安。

虻蛄よけらそは指なるぞ足なるぞ

太田 實

パプア人杵を巧みに寒の餅

北川 光子

千を超える言語があり、多種多様な伝統的生活を続けるパプアニューギニア。赤道直下の国ではあるがもしかして、日本の餅掲ぎに似た習慣があったりとか。そう考えると世界中の人皆に親しみを覚える。寒餅を掲ぐことすらめつたにない昨今、めづらしい場所をとらえられた。

「けら」はバッタ目ケラ科で3センチほどのコオロギに似た昆虫。前肢が大きくてモグラのように土をほり、夜には農作物を荒らし「じい」と鳴く。グロテスクな虫に、それは指か？足かな？と親しく呼びかける作者。私も昭和46年にへ虻蛄鳴く島男湯女湯に通じ 鈴子と天草で詠んだ。

緒方拳科白にはなき咳重ね

吉田 耕人

最晩年の作品「風のガーデン」がテレビで放送された。

死に至る重病を曖にも出さず淡々と演じきり、彼は逝った。台本や演出にない咳が、撮影現場ではアドリブとして、見る側には完璧な演技として映った。名優とはこうしたものが。心情の伝わる佳句。

クラス会喜寿十五名一氣に春

本木下清美

本当の春には少し間のある梅の頃、さて何年ぶりのクラス会なのだろう。すでに何人かは幽明界を異にし、病に臥す人もある年齢。ともあれ集まった十五人は皆元氣。それぞれが老境にあるなどはつゆ思っていないのは「一氣に春」が語っている。

川に水ひと筋太り初ひばり

小松美保子

未だ長閑とは言いがたい春寒の空に、それでも初々しいひばりの声。この頃より雪解で川の水嵩が増しはじめる。当り前のことを「ひと筋太り」と表現されたことで秀句に。

凍雲の居すわる下の石の町

岡本 幸代

石を切り出す灰褐色の低い山。見渡すかぎりごつごつと石肌を曝し、その上を凍雲が覆えば一層の寒々しさ。こんな日も石を切る掘削機の音がひびく。イの母音づかいに、さりげない工夫のあとがうかがえる。

豆撒きの杓は横文字「ハードロック」

仲田 眞輔

一升杓には「メジャーカップ」とでも、それも英字で書かれてあるのだろうか。鬼はと云えばビートのきいたハードロックに乗って登場するらしい。同時掲句に、金棒でリズムを取る鬼の句もあり、まことに不可思議かつ愉快な節分会に、来年は是非ともお招きいただきたい。

水温む指の節々までやさし

森山八重子

少し前までの指を刺すような寒の水と、お彼岸に墓を洗った水とでは、そう云えば後の方が手にやさしく、水にあたたかさを感じられた。一日中水を使う主婦は誰よりも早く、微かな水温の変化に気付く。へ水ぬるむ主婦のよるごび口に出て山口波津女を思い出させていただいた。(以下略)